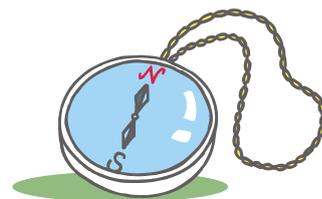


羅 針 盤



第 **24** 号

令和2年（2020年）11月9日（月）

◆ 失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ

「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」この言葉は、「パラリンピックの父」と呼ばれるイギリスの医師グッドマン博士が残した言葉で、パラリンピックの理念を表しています。第2次世界大戦が終戦を迎えた後、1948年7月にロンドンでオリンピックが開催されました。その開会式の日、グッドマン博士は病院内で車いすのスポーツ大会を開きました。参加者は16人、競技はアーチェリーのみでした。これが現在行われているパラリンピックの原点となったのです。来年に延期された東京パラリンピックは、コロナ禍の影響がなければ、約4400人が22競技、540種目を繰り広げることとなっていました。「失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」という言葉は、障がい者スポーツの文脈でいわれた言葉ですから、本来「失われたもの」とは、身体の機能のことを指していたわけです。これが、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、行動が制約され、今年行われるはずであったオリンピック、パラリンピックを含め多くのものが失われた今、より広い意味で解釈がなされ、人々の指針となっているといえます。3月からはじまった臨時休校期間は5月末まで続き、時間だけでなく多くのものを失ったことに間違いはありません。しかしながら、過去を振り返り失ったものをいくら数えてみたところで、過去の出来事を書き換えるようなことは誰にもできません。それよりも、残されたものを最大限に生かして、これからの未来に役立てていく、今回のコロナ禍の中からも学ぶべきことは数多くあったはずで、取り返す方策を考えながら、未来に向けたビジョンをつくりあげていくことこそが、これからのこの世界で生きていく私たちに与えられた命題であると考えていくべきではないでしょうか。今週末の13日（金）に行われる体育大会も、規模を縮小し、時間を短縮して行います。制約が多い中での実施とはなりますが、思い出に残る体育大会となることを心から願っています。

◆ ベストを尽くす

「挨拶」については、これまでに何度もこの校長室だより・羅針盤でもふれてきましたが、心のどこか片隅に「挨拶ぐらい、いつだってできる」などと軽んじていると、意外にここぞというときにきちんとできないことがあります。日頃から本気で準備をしておかなければ、いつもは簡単にできることすら失敗へと向かってしまい後悔する人たちは、残念なことですがたくさんいます。本番で頑張れば良いと考えて、手を抜いたり、行動をおろそかにしていたり、つまりは「ベストを尽くす」ということを忘れてしまっていると、決して良い結果は訪れないでしょう。この週末に行われる体育大会もそうです。日頃の成果の結果があらわれるものであり、偶然良い結果を得るようなことはありません。練習や、そして、準備を怠らなかつた結果として、自分のベストが出しきれずははずです。本番への備えとなるべき自分自身の持つ「ベスト」を、緊張感を持ちながらも、しっかりと出しきれよう臨んでもらいたいと思います。

